

## 軍事遺跡の眺め方（なぜか無口な遺跡群）

元東京大学准教授、元町文化財保護審会長 服部 正策

私が1980年から40年間勤務していた東京大学医科学研究所奄美病害動物研究施設は旧海軍の水上飛行艇の基地跡に立地している。明治時代から名瀬市内にあったハブ採毒のための大島出張所の敷地は米国統治下で公共施設になっていたのも、内務省が管理していた瀬戸内町須手の米軍駐留跡地を移管してもらったと聞いている。奄美大島が本土復帰を果たした数年後の話である。

敷地の海岸まで広がるコンクリートは海岸部では波に浸食され、基礎部分のチャート(中生代に太平洋底に沈殿した放散虫のケイ酸カルシウムに起源を持つガラス質の堆積岩)が海岸に転がっている。チャートは旧海軍が加計呂麻島から運んできたと言われている。残念なことに県道の真下にあった分厚いコンクリート製の防空壕や天井が高い大きな防空壕などは県道拡幅工事の時に埋め立てられた。厚いコンクリートで作られた防空壕を破壊し撤去する工事に手間取り、工事関係者はあのまま道路の基礎にしておいた方がはるかに安定していたとぼやいていた。そういえば、研究施設の電線管を埋設する工事も手間取っていた。コンクリートの下にはチャートの礫がぎっしり埋め込まれていたからだ。ずいぶん頑丈な基地を作ったものだ。須手地区の人からは水上飛行艇は山裾の格納場所に引き上げて木の枝で隠していたという話は聞いていたが、基地の使われ方に関する情報はなかった。

奄美大島で研究を始めてから十数年後、職場の海側で海を眺めている3人が目に留まった。聞くと終戦間際にこの基地によく通ってきていたという。米軍機がいなくなる夕方に佐世保を出発して、夜に大島海峡に着水して須手の基地に物資を届け、夜明け前に佐世保に向かって飛び立っていたそうだ。しかし、当山昌直、安溪遊地がまとめた「奄美戦時下 米軍航空写真集」(南方新社)には、終戦の年の春に米軍が撮影した須手地区の焼き尽くされたように見える写真が載っており、毎夜飛行艇で往復するような基地には見えない。

ところが、最近アメリカが公開した奄美群島の武装解除のフィルムには思いもしない光景が撮影されていた。徳之島の浅間飛行場で戦闘機を破壊する映像や、100隻以上の震洋艇や大量の木箱を海岸に集めている映像とともに、須手にあった大きな防空壕から運び出された爆弾や銃器などが山積みになっているの映像があった。海岸に落ちた水上飛行艇の残骸も撮影されていた。

しかし、これらは大島海峡に作られた海軍基地と陸軍の奄美要塞のごく一部であったことが、瀬戸内町文化財保護審議会の委員研修に始まった数多くの現地調査により明らかになった。

20年ほど前、瀬戸内町文化財保護審議会の委員に誘われた。会長の前田芳之氏は昆虫や植物の調査の仲間であったが、マンガン鉱山や戦争遺跡、奄美大島に隠されているという金塊や大島海峡に沈められたという水銀の壺などの夢多い話を数多く紹介してくれていた。

最初に調査に行った西古見地区の観測所には驚いた。狭い窓から見える江仁屋離や須子茂離、ハミヤ島などがその方位角とともに彩色を施して窓の上の壁面に描かれているのである。その後、明治時代に建てられた赤煉瓦が美しい久慈の貯水槽、静かな谷に突然姿を現す三浦の貯水ダム、4基の砲座に二つの弾薬庫を備える実久砲台跡、弾薬庫や観測所などが残る安脚場砲台跡、なぜか粉々に破壊された皆津崎の望楼など数多くの戦争遺跡の調査を行ってきたが、どの遺跡も想像以上の規模であった。

こういう堅固な遺跡のほかに、よくわからない構造物も見つかる。加計呂麻島の徳浜の上には、コンクリートを打った小さな水場があり、そこから深さ50cmほどの浅い塹壕が海に見える方へ枝分かれして伸びていた。数人で小さな陣地を構えようとしていたような遺構である。

油井岳山頂付近は希少な動植物の宝庫であり、地頭峠からのコンクリート舗装された軍道と呼ばれていた道をよく通っていた。道路の上は森の木々が覆いトンネルのようになっていて風情があった。現在の林道は拡幅整備されて、かつての面影はないが、森の中で希少種の調査を行っているとき、奇妙なものを見かける。コンクリートでできた四角い水溜が谷の底にポツンとあったり、3m～10mくらいの長さの中途半端な防空壕のような穴が掘られている場所もある。尾根道を歩くといたところで見え隠れするのが、一辺が1m深さ1m弱の四角い穴である。大きいものは簡素な炭焼き跡だが、この小さな穴の謎は徳之島でハブの調査をしているとき解けた。ハブの調査に協力してくれた人は終戦前に奄美大島に動員されて、来る日も来る日も油井岳で穴を掘り続けていたそうだ。米兵が上陸してきたときにはその穴に隠れ、追いかけてくる米兵を狙撃するためのもので「タコツボ」と呼んでいたそうだ。

このように瀬戸内町には多くの遺跡がある。ぜひ足を運んでほしい。ただし、瀬戸内町のホームページにも遺跡には施設の崩落崩壊の可能性があること、危険な構造や立地条件にあること、民有地には立ち入り禁止、電波が届かないなどの注意喚起がしてある。発掘調査に携わったことのあるエコツアーガイドや街歩きガイドに案内してもらうことをお勧めする。

手安弾薬庫や安脚場砲台跡などは普通の服装でも見て回ることができるが、他の軍事施設跡では軍道は荒れていて施設内には水たまりも多い。ブユ、ヤブカ、ダニ類などの吸血昆虫も多いので、長靴などのしっかりした足回りが必須である。また、弾薬庫や防空壕の中にはアマミマダラカマドウマ、オオゲジなども多く、まれにハブやヒャン、アカマタなどのヘビも入っていることがあるので、懐中電灯を忘れずに持参しよう。弾薬庫や防空壕、震洋艇の格納壕には驚くほど多数のコウモリも生息している。多くはオリイコキクガシラコウモリ(環境省絶滅危惧ⅠB類)で、まれにモモジロコウモリが混ざる。夜行性動物の眠りを妨げないように気をつけていただきたい。特に冬期は冬眠状態になっているので、眠りを覚まさないようにしよう。

余談になるが、防空壕や格納壕はオリイコキクガシラコウモリの大切な繁殖場所になっている。呑之浦の格納壕のいくつかは入口に近い場所で落盤が起きているが、山の斜面に小さな開口部がある。アリジゴク(ウスバカゲロウの幼虫)の巣のようになっていて危険な入口である。その中のコウモリ調査では、オスのコウモリだけがいる壕と、妊娠したメスのコウモリだけの壕が並んでいた。風化の進んだ震洋艇の格納壕や避難壕は落盤の危険性が高いことも注意していただきたい。

動植物の調査で奄美大島の多くの山頂に登ったが、ほとんどすべての山頂に眺望の利く岩場はない。登山道も森の中で見晴らしの良い場所は少ない。ところが、戦争遺跡は海を見渡すことができる場所に立地しているので、どこに行っても絶景を見晴らすことができる。

美しい海を眼下に見下ろせる砲台や観測所跡、森の中に突然姿を現す弾薬庫や兵舎など、奄美大島の美しい自然とは全く異質の軍事遺跡を見て、戦争のために費やした莫大な労力を想像してみたい。